シンポジウムS1-1
「高気圧酸素治療室内への持込物に関する全国アンケート」集計結果報告

石川勝清
北海道大学病院　ME機器管理センター

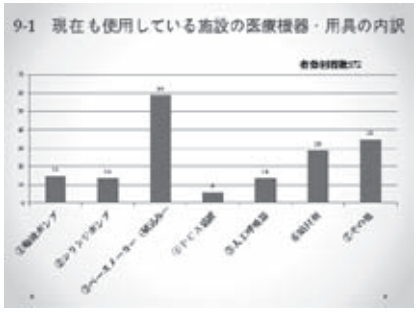
【はじめに】第47回学術総会に於いて，高気圧酸素治療室内及び装置内への医療機器の持込・使用に対して「学会として実際の臨床に使用できる指針を出す事」であるとの問題提起がなされ，第48回学術総会　鈴木信哉会長のご発案で問題解決に向けた対策を講じる方向性を示す第一歩に繋がるべく「シンポジウム」が企画され，技術部会の「医療機器安全管理及び事故対策委員会」事業として，現状の把握を目的としたアンケート調査を実施し，その結果を踏まえて問題提起を行なう事とした。

【方法】高気圧酸素治療安全協会の協力の下，安全協会が把握している全国611施設へ郵送によって行った。アンケート内容は「設備及び稼働環境」について9項目，「装置内持込物使用状況」について13項目とし回収期間は2週間と設定した。

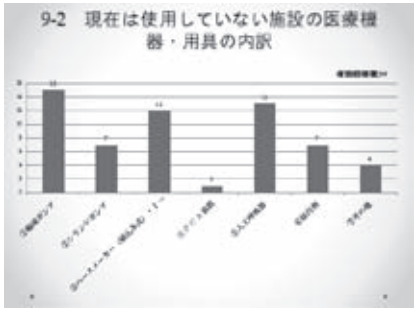
【結果】アンケート回答への返信があったのは290施設で回収率は47.4％であった。なお，宛先不明で12施設からの返送があった。≪装置及び稼働環境≫の設問では「日本高気圧環境・潜水医学会」入会者は回答施設268施設中496名で内訳は医師168名，技士289名，看護師49名であり，専門医は112名（他学会専門医23名）臨床高気圧酸素治療認定技師は198名（他学会認定技師76名）で多くの施設で専門医・認定技師不在のまま治療が行われている現状を確認できた。又，「高気圧酸素治療の安全基準が学会より示されていますがご存知ですか」の設問に対して回答施設273施設中6施設が「いいえ」とあり，本会・安全協会・各地方会が協力して安全基準の啓蒙活動の必要性を感じた。≪装置内持込物使用状況≫の設問では，「装置内へ医療機器を持込，使用した経験はありますか」に対して回答280施設中「はい」（現在も使用している）が90施設，「はい」（現在は使用していない）が38施設あり，それぞれの内訳と現在使用中と回答のあった輸液ポンプ・シリンジポンプ・人工呼吸器の機種名を以下図①・②・③・④・⑤に示す。

使用しなくなった経緯や医療機器を持込まない理由として代表的な意見は，「学会の安全基準に準じて」が多数を占めたが，「メーカーの承認が無い」「添付文書」をあげる施設が多かった。又，「医療機器・用具について治療中の安全や性能が確認されれば使用したいか」の設問に回答255施設中180施設で使用したいとの回答を得，「医療機器又は用具を安全に使用するための講習会があれば参加したいか」の設問では回答263施設中224施設から参加したいとの回答を頂いた。安全が確認されれば多くの施設で医療機器の持込や使用を考えていると推察されたが，一方では持込や使用に対して慎重な施設も多数存在した。

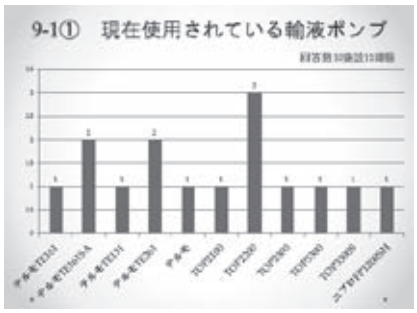
【考察】今回，技術部会の「医療機器安全管理及び事故対策委員会」事業として，現状の把握を目的としたアンケート調査を実施した。その結果から様々な事が懸念事項として読み取れるが，その中でも敢えて次の点を問題提起として挙げる事とした。ソフト面では，①日本高気圧環境・潜水医学会への未入会施設が多い。②安全に関する情報手段として学会誌，安全協会ニュースと情報ソースは限られているが十分な情報が提供されているか。③専門医の数が極めて少ない。④従事する技師として看護師の教育面が不透明である。ハード面では，①持ち込まれる機器に関して，その安全が担保されるだけの取扱指針がないまま使用されている現実がある。②機器を持ち込むに当たりそのリスクが明確にされていない。③発生したアクシデント，インシデント等の情報公開は必要ではないか。これらの問題を解決して行く為には例えばソフト面では本会，ハード面では安全協会と技術部会が担う等方法が考えられるが，高気圧酸素治療における安全性の確立と言う点で捉えると，日本高気圧環境・潜水医学会が総意を揚げ組織作りをし，三位一体で取組む必要があるのではないかと思われた。



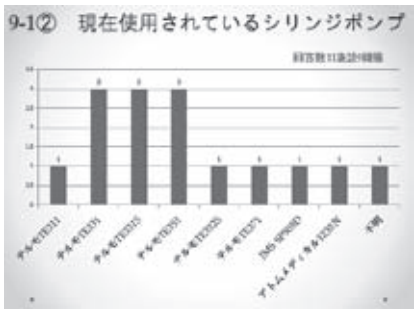
図①



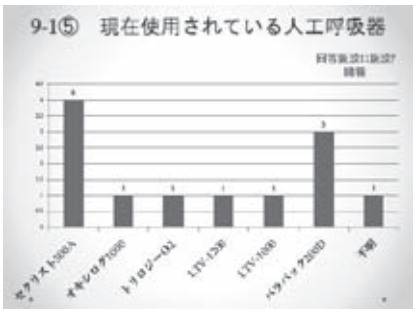
図②



図③



図④



図⑤